令和５年度　総務経済委員会　行政視察報告書

震災復興後のまちづくりについて

日付:令和５年７月 12 日(水)
場所:宮城県東松島市
　　奥松島ウラブハウス、東松島市震災復興伝承館
目的:東松島市の東日本大震災後の復興経験から、伊豆市の地震対策と復興策を学ぶ。

　視察の際、全国の多くの自治体から派遣された応援職員の存在を確認できました。
被災地に向けて、全国から応援物資やボランティアの参加があり、公共からは自衛隊、警察、消防、レスキューの活躍もメディアでも知っていたが、このまちだけではなく、震災からの復興を必要としているそれぞれのまちに当市からも職員が復興に深く携わり活躍していたこと、これにより、復興作業や行政サービスの提供が迅速に行われていたと考えます。
様々な地域や背景を持つ職員からの多様な意見やアイデアが、復興の質を向上させていたと考え、議員、伊豆市民としても大変誇りに思いました。
　震災の復興作業には、地域住民が雇用により活躍できる震災ごみの分別等がありました。
一時的に雇用を失った方達の中には、その際に取得した重機の操作から、免許取得をされごみの分別作業の終了後には地元で重機オペレーターとして活躍している方もいると聞きました。復興時から住民の将来を考え、雇用創生することで復興後にも地域に住み続けていただくことができたんだと感じました。
また、東松島市の復興は、ただのインフラの回復や建築の再建に滞らず、住民の意見や要望を第一に考えたまちづくりが進められていましたことに感銘をうけました。
以上の経験と所感を基に、伊豆市でも災害発生時、復興時の対応策を考え、住民の声を反映したまちづくりの推進を考える必要があるのではないかと考えます。

フューチャーデザインによる水道料金の改定について

日付：令和５年７月１３日（木）
場所：岩手県矢巾町
　　矢巾町役場
目的：フューチャーデザインによる水道料金改定の知恵を学ぶ。

　フューチャーデザインは数十年先の未来人になったつもりで、現在起きている、または起きるであろう課題に向き合う手法です。
　矢巾町はフューチャーデザインを取り入れて、住民自身が水道事業の持続可能性について将来世代の視点になり、現在の課題を解決する方法として実践されていました。

矢巾町では、ワークショップに参加した住民に 5000 円の参加料を支払うと聞き、少し踏み込んだ取り組みで驚きました。しかし、多くの住民参加を促すための努力が伺えました。新しいことに挑戦するには、いつでも新しく、違った角度からの視点を持つことが必要だと考えさせられました。
また、矢巾町はフューチャーデザインを考える住民参加イベントが数多く、住民が机上での座学だけではなく、浄水場など直接、水道にかかわる市の施設見学も行うことから、市民が市職員が市民のために働く姿を見学することで、市職員の苦労を理解するきっかけになることを聞きました。
また、フューチャーデザインは、どのような課題に対しても有効で、大切なことと感じました。私も伊豆市の事業、そして議会の判断も市の将来に大きく影響することになると経験しています。伊豆市も住民とフューチャーデザインを取り入れ、伊豆市の課題を幅広い世代で、新しい視点も取り入れ、考えていく機会が必要だと考えています。

震災復興後の持続可能な観光地づくりについて

日付：令和５年７月１３日（木）
場所：岩手県釜石市
　　魚河岸テラス

　釜石市が震災後の復興の見通しとして「会いに行く観光」として体験を新たな観光資源として発掘をしてきたことを確認しました。
「釜石市は、新日鉄があることから企業城下町に頼り切ってきた地域」だったと聞きました。地域住民や事業者との連携を強化するなかで、地域にある企業と観光をマッチングさせ、ほかの地域にない体験を生み、釜石に訪れてもらい長い時間滞在してもらう工夫をしてきました。
どこのまちにもある体験は、単価が安く事業収入・売上では体験を提供する事業者に還元できていなかった。滞在時間を延ばし、単価を見直すことで確実な売り上げと漁業や林業事業者にも、しっかりと還元できるようになってきました。
持続可能な観光を他の地域と差別化を図るため、社会経済支援に力を入れて地域企業の商品を限りなく利用している様子がありました。
一例の観光船クルーズは、漁師に協力を得て、大きな観光船ではなく、漁船を利用した漁船クルーズを行うことで固定費が不要になり利益率が上がったこと。マイクロプラスチックをみる体験は、漁船ですくった海水を地域の岩手大学の顕微鏡でマイクロプラスチックをみることで、サスティナブルな経験もできるようになったと聞きました。漁師への還元ができ、大学とも連携をする産学官連携につながることになったと聞き、とても繋がりの強いある観光体験であると感じました。
　釜石ＤＭＣは魚河岸テラスと震災伝承館の指定管理はあるが、直接的な補助金は無しと聞きました。また、市の職員（部長、課長）は役員として３名、ほかに職員は入らず、二十数名の職員のうち地元採用が半数ということから地元雇用にも貢献していると感じました。

会話の中で、防災無線に日本後の後に英語での案内もしているという事でした。それを聞き、伊豆市も観光防災に向け試験的に発信することも必要なのではないかと考えました。

2023 年に行くべき 52 か所に選ばれたまちづくりについて

日付：令和５年７月１４日（金）
場所：岩手県盛岡市

視察の際には、盛岡市が「2023 年に訪れるべき 52 か所」に選ばれるに決まった背景や決意を確認しました。
盛岡市は、ニューヨークタイムズ紙での紹介を機会に、市長、議会で積極的な大きな予算をつけ、スピード感を持ち、全国へ盛岡の宣伝をしたと聞きました。
また、コロナ過でも、盛岡に来ていただいた観光客に楽しんでもらうため、それ以外の目的としても伝統的な盛岡さんさ踊りを日頃より見ていただく事で、伝統芸能のお披露目の場がなくならず、伝統の継承、保存につながる取り組みにも力を入れていたという事で、日本の伝統を途切れることなく、後世につなげていけることはとても良い取り組みだと感じました。日本伝統と思われるすべてのことに必要な取り組みであることだと考えさせられました。
さらに、説明の中で、ニューヨークタイムズに取り上げられたが、これまで大事にしてきたものが壊れたり、変わってしまわないことと、人や風土、文化を大事に守っていきたいという思いが伝わってきました。
伊豆市としても、盛岡市のまちづくりから、古くからの伝統や歴史を見つめつつも、新しい文化やイベントを取り入れて、市内、市外からの訪問者に新鮮さを提供する必要があると感じました。

最後に、盛岡ふるさとガイドで市内視察をさせていただきました。高齢の男性でしたが、30 度を超える暑さの中で一生懸命案内するガイドの姿勢と盛岡を知ってほしいという熱意が伝わる案内に、伊豆市の観光ガイドについても改めて知る必要があると感じ、伊豆市の伝統、文化、風土を未来に残す取組みにも力を入れたいとおもいます。